日吉台地下壕保存の会会報

第１１９号

日吉台地下壕保存の会

ゆずり葉の木を知っていますか

運営委員　大西　章

ゆずり葉の木を知っていましたか。私は知りませんでした。譲葉ともかくそうです。教えて下さった方は小沼通二さんです。

1 月 31 日開かれた公開講座の中で、30 代の若者から「我々世代に何か一言」をとの質問に、「私は今どきの若い者はなどと一言も言うつもりはない。自分の方が先にいなくなる。そのときは何も持っていくことが出来ない。すべてのものを若い人たちに譲っていく。自分は美しいものを良いものを譲りたいと思っている。君たちも自分で考えて、必ず選挙に行くとか、市民運動やボランティアなど社会にかかわることはいくらでもある。それが出来るように考えて、自分で精一杯生きてください。」と言われた。

すばらしい言葉ですと小沼さんに伺うと、実は河井酔茗の詩『ゆずり葉』からですと教えてくれた。

若葉が出た後、前年の葉はすぐに落葉する
http://www.hana300.com/yuzuri1.html より

こどもたちよ、
これはゆずりはの木です。
このゆずりはは
新しい葉ができると
入れ代わって古い葉が落ちてしまうのです。
こんなに厚い葉
こんなに大きい葉でも
新しい葉ができると無造作に落ちる、
新しい葉にいのちを譲って。

こどもたちよ、
おまえたちは何をほしがらないでも
すべてのものがおまえたちに譲られるのです。
太陽のまわるかぎり
譲られるものは絶えません。

輝ける大都会も
そっくりおまえたちが譲り受けるものです、
読みきれないほどの書物も。

目　　次

巻頭言　ゆずり葉の木を知っていますか　大西章　1p
報告　公開講座「地下壕に時代、青空の時代」（小沼通二氏）を聞いて　亀岡敦子　2～3p
報告　第 9 期ガイド養成講座始まる　喜田美登里　3p
報告　神奈川県立歴史博物館特別展『日吉台地下壕と戦後 70 年―横浜』亀岡敦子　4p
新聞記事　歴史博物館特別展　東京・神奈川新聞　5p
報告　港北図書館パネル展示・講演会　小山信雄・佐藤宗達　6p
寄稿　日吉勤務の元電信兵　大島久直さんからのお手紙　特攻隊員から「ワレ、イマカラ、ジバク」と受信　7～9p
転載　楽・遊・学　わがまち港北　第 189 回「日誌が語る日吉の連合艦隊司令部」林宏美　10～11p
新聞記事　記憶の風景戦後 70 年産経新聞 2015.2.8　11p
新聞記事　次世代に記憶を伝える　朝日新聞 2015.1.24　12p
書評　『「戦場体験」を受け継ぐこと』　小山信雄　12～13p
連載日吉第一校舎ノート(7)　阿久沢武史　13～14p
日常の活動より　アンケート　15p
活動の記録　16p

みんなおまえたちの手に受け取るのです、
幸福なるこどもたちよ、
おまえたちの手はまだ小さいけれど。

世のおとうさんおかあさんたちは
何一つ持っていかない。
みんなおまえたちに譲っていくために、
いのちあるものよいもの美しいものを
一生懸命に造っています。

今おまえたちは気がつかないけれど
ひとりでにいのちは伸びる。
鳥のように歌い花のように笑っている間に
気がついてきます。

講演中の小沼通二氏

そしたらこどもたちよ、
もう一度ゆずりはの木の下に立って
ゆずりはを見る時がくるでしょう。

河井酔茗『花鎮抄』より

美しい国土と実り豊かな里山をゆずり受けました。
ともに助け合いながら暮らしていく社会をゆずり受けました。
世界に二度と戦争しない国をゆずり受けました
武力によらない平和をめざす国をゆずり受けました。

しかし、私たちは福島で放射能まみれの土地をつくってしまいました。
私たちは、今、沖縄辺野古でジュゴンと珊瑚の大浦湾をコンクリートで破壊しています。
そして、戦争を出来る国へと向かっています。

70 年前にゆずり受けた地下壕の中で、このゆずり受けたものを守り、そしてさらに創り上げて、これから十年、百年、千年と若者に向かって胸を張り、ゆずれる努力をしたいと思っています。

報告

第 9 回日吉台地下壕保存の会公開講座
小沼通二さんの講演「地下壕の時代　青空の時代」をきいて

今年度の公開講座は、日本を代表する物理学者である小沼通二慶應義塾大学名誉教授を招いてひらかれました。参加者は 63 人で、多くは会員でしたが、港北区の広報紙「楽・游・学」や地域紙「タウンニュース」で講演を知ったという方も多く、来往舎大会議室は満席となりました。パワーポイントを駆使してのユーモアを交えたテンポの良い語り口と、史実を冷静に知ったうえでこそ持てる、未来を信じる姿勢に感銘を受けました。
小沼通二さんは1931年東京生まれの84歳、理論物理学者で素粒子論が専門です。直弟子ではありませんが、学生時代から湯川秀樹や朝永振一郎の謦咳に接し、学問上だけではなく、平和のために行動し発言する科学者としての生き方も、学ばれたのでしょう。小沼さんは、1955年に結成された知識人による平和問題に関する意見表明のための会「世界平和アピール七人

委員会」の現在の 7 人のうちのひとりの委員であり、事務局長でもあります。また「パグウォッシュ会議」という、1957 年ラッセルとアインシュタインの呼びかけで作られた、核兵器と戦争廃絶を訴える科学者による国際会議にも関わりを持っておられます。

講演は 3 部構成で行われました。

《1部　1945 年まで　戦争の時代》

ここでは、14 歳までが戦争の時代であった体験を話されました。東京の自宅の庭にも、疎開先の親戚の庭にも防空壕があったこと、つまり日本中に地下壕があったのです。8 月 15 日の小沼少年の率直な感想は、「これで防空壕に入らなくてよく、青空を見上げることができ、電燈を自由につけられるときが来た」だったということです。そして第 1 次世界大戦前の 1911 年から始まった空襲やその後のミサイル攻撃、無差別爆撃と原爆投下へと言及し、国際人道法の内容と意味合いを説明されました。

《2部　1945 年からこれまで》

日本国憲法のもとでの日本と世界との約 70 年間を振り返り諸国民は、日本の政策を支持していると強調されました。日本国憲法の精神は、第 2 次世界大戦の惨禍を世界が力を合わせて乗り越えようと、謳われた国連憲章の精神とも合致します。1946 年生まれの私は、すっぽりとこの安心感に包まれて生きてきたことになります。

《3部　これからどこへ向かうのか》

ここで、小沼さんのまさに小沼さんらしい発言を聴くことになりました。様々な困難はあるにしても、戦争のない安心して生活できる安全な社会に向かっての潮流は流れており、核兵器廃絶への歩みは世界の世論に支持された歴史の流れである、と説かれます。知識をえて、考え続け、行動しようと呼びかけられました。この場にいた私たち一人一人は、この言葉をしっかりと受け取り、気持ちを新たにした、意義深い講演会でした。(運営委員　亀岡敦子)

報告

第9期ガイド養成講座始まる

1 月 17 日から第 9 期日吉の戦争遺跡ガイド養成講座が始まりました。1 月から 5 月まで座学・ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ・定例見学会でのガイド補佐などを学んでいきます。

今回は 4 名の方が申し込まれました。17 日のプログラムは、保存の会の始まりと歩み・主な活動、日吉台の戦争遺跡の概観、昨年受講した新人ガイドの体験談。当日参加した保存の会メンバー17 名と受講者の自己紹介もおこないました。第 2 回からもう 1 名受講者が加わる予定です。

第 1 回ガイド養成講座学習風景

第 1 期を始めた時は定員 30 名で募集したところ、60 名以上の申込みがあり、慌てたものです。当時はガイド志望というより地下壕に興味がある、見学したいといった方の方が多かったかもしれません。今では定例見学会も定着して、養成講座の受講者は少数になりましたが、受講後にガイドになってくださる方がほとんどになりました。現在、地下壕のガイドの半数以上がガイド養成講座修了者です。

報告

神奈川県立歴史博物館の特別展

日吉台地下壕と戦後70年　―横浜

日吉台地下壕保存の会副会長　亀岡敦子

戦後 70 年の今年、1 月 31 日から神奈川県立歴史博物館で特別展「陸にあがった海軍―連合艦隊司令部日吉地下壕からみた太平洋戦争」が始まりました。歴史と実績のある歴史博物館での展示は、私たち日吉台地下壕保存の会の会員にとって、夢のように嬉しいニュースです。展示は「Ⅰ日吉に海軍がやってくる・Ⅱ日吉にきた海軍とその施設・Ⅲ日吉と特別攻撃隊・Ⅳ日吉と戦艦大和の最期・Ⅴ本土空襲、そして終戦へ・Ⅵ海軍生活」の 6 部構成で、写真パネルから湯呑まで展示されており、日吉が立体的に取り上げられています。年齢もさまざまな来場者はみな熱心に展示をみていて、身の引締まる思いがしました。

〈2.6 キロの地下壕〉

横浜市港北区日吉には、約 13 万坪の緑豊かな慶應義塾日吉キャンパスが広がっています。ここは 1934 年予科校舎として開校しましたが、日中戦争、太平洋戦争がはじまるにつれ、学園の戦時色は濃くなり、43 年秋からの学徒出陣と学徒勤労動員で校舎から学生の姿は消えました。そこに慶應義塾と賃貸契約を結んだ海軍がはいり、ついには伝統的に海上の旗艦で指揮を執っていた連合艦隊司令部までが陸に上がり、9 月には大学寄宿舎は司令本部となったのです。同時に地下にはおよそ 2.6 キロにおよぶ堅牢なコンクリート製の巨大地下壕が突貫工事で造られ、通信や暗号解読などに多くの将兵が従事していました。戦争最後の一年間のレイテ沖海戦・硫黄島戦・戦艦大和の沖縄出撃、沖縄戦などの作戦指令は日吉から出され、特攻隊員の最後の通信の多くも地下壕の通信兵が受けたそうです。

〈学びの場〉に

89 年 4 月、慶應義塾教職員と地域住民有志 100 名が集まり、「日吉台地下壕保存の会」が発足しました。以来 25 年間、紆余曲折はありましたが、地道に活動を続けてきたと自負しています。見学者の案内、会報発行、聞き取りや文献調査などからの知識の蓄積と共有、展示会や講演会の開催などが主な活動です。ほかに戦争遺跡保存全国ネットワークの会員として、全国シンポジウムを 3 回開催しました。

幸にも日吉台地下壕の大部分は、慶應義塾構内にあったため当時とあまり変わらず残されていますが、一昨年、民有地にある地下壕の一部が宅地開発により破壊されました。私たちは、なんとも形容のできない無力感におそわれました。70 年の歳月をくぐり抜けて現存している全国の戦争遺跡を、誰もが訪れることのできる学びの場としたいと、強く思いました。これからの活動の大きな課題です。戦争の語り部としての戦争遺跡は、大事に次の世代に引き継がなければならない貴重な文化財なのです。　　2015.2.4 しんぶん赤旗より(加筆)

神奈川県立歴史博物館　特別展

〈　陸にあがった海軍　連合艦隊司令部からみた太平洋戦争　〉

2015 年 1 月 31 日～3 月 22 日　開館時間 9 時 30 分～17 時　月曜日休館

○アクセス　みなとみらい線「馬車道駅」から徒歩 1 分市営地下鉄「関内駅」から徒歩 5 分
JR「桜木町駅」「関内駅」から徒歩 8 分

○観覧料　大人 900 円　20 歳未満・学生 600 円　65 歳以上・高校生 100 円
中学生以下・障がい者手帳をお持ちの方は無料

○学芸員による展示解説　2 月 28 日・3 月 22 日　13 時 30 分～
（毎日　ボランティアガイドの解説あり）

神奈川県立歴史博物館　横浜市中区南仲通 5－60　tel 045－201－0926

○神奈川県立歴史博物館　特別展 の新聞記事

県立歴史博物館できょうから展示会「陸にあがった海軍」

約170点の資料が展示された会場で来場者がながめる今泉さん（横浜市中区で）

旧日本海軍の連合艦隊司令部があった、横浜市港北区の日吉地下壕の新たな調査結果などを展示する「陸にあがった海軍」が二十一日、横浜市中区の県立歴史博物館で始まる。学芸員の千葉毅さんさは「日吉という身近な場所に、第二次世界大戦中の主要な作戦を指揮した場所があることを知り、戦後七十年を考えるきっかけにしてほしい」と話している。三月二十二日まで。（小沼誠一）

戦後70年

旧海軍は、主力艦隊の先頭に司令部が設置され、海上で指揮をとることが伝統だった。しかし、第二次世界大戦は戦域が広大で、司令部は通信施設が整い、中央官庁と連絡が取りやすい場所に置かれることが求められた。そのため、司令部は一九四四年九月に慶応義塾大学の校舎があった日吉に移動、一九四五年四月の戦艦大和の沖縄への海上特攻の際も、日吉から作戦を指揮した。

同大と同博物館は二〇一一―一二年、共同で壕内の測量などを実施。日吉一帯の壕は総延長約九キロで、通路は高さと幅が約二メートル、作戦室は横約四メートル、高さ約三・五メートルある。壕を固めるコンクリートは厚さ約五十センチあり、現在のトンネルの倍以上の強度があることもわかった。

一方、通信などを担当した艦隊司令部の壕は一九四五年一月に掘られはじめ、未完成のまま、空襲で被災した東京都大田区の旧海軍航空技術廠などの住宅のブロックが使用され、急ごしらえで作られ、強度は低いとみられる。艦隊司令部の壕には、「敵戦ノ成ハ戦力ノ不足ニ非ズ日本精神ノ不足ト敵来襲地ノ近艦ナリ」という下官の記述もあり、敗戦に対するさまざまな思いをしのばせる。

観覧料は大人八百円。問い合わせは同館、電045（201）0926へ。

●横浜住宅から弓軍が買い上げたブロックが使用された連合艦隊司令部の壕
●寄せ書きが書かれた女性事務職員の手帳（いずれも同館提供）

日吉地下壕 内部調査結果を公開

「戦後考えるきっかけに」

2015.1.31 東京新聞

調査通じ戦争知る

地下壕内で見つかった照明がや大谷石などの建材が展示されている特別展＝横浜市中区の県立歴史博物館

戦後70年

戦時中、横浜市港北区の慶大日吉キャンパスに建設された旧海軍地下壕に関する特別展「陸にあがった海軍」が、同市中区の県立歴史博物館で3月22日まで開かれている。壕には連合艦隊司令部が置かれ、戦艦大和の特攻出撃命令も出されたとされる。昨年の調査で収集された建材の破片や資料などが展示され、敗戦へと至る軍首脳の「現場」を生々しく伝えている。（斉藤　大悟）

地下壕は総延長6キロ超。戦局の悪化に伴い、海上の旗艦に置かれていた司令部を安全な場所に移す目的で造られた。現在も大部分が残存し、市民団体「日吉地下壕保存の会」などが調査や案内を続けている。

特別展の前期は「連合艦隊司令部日吉地下壕からみた太平洋戦争」。写真や図面、壕内外で発見された電気配線や食器の破片など200点近くが並ぶ。個人蔵も含めた遺物の「再整理」を経て、関連資料の一部展示が初めて実現した。

同館は慶大と共同で2011～13年度に詳細調査を実施し、3次元測量による詳細な図面を作成。これまでに発掘、収集された破片が、小倉部や懐中電灯の一部であることも判明した。

展示に関わった同館の千葉毅学芸員（考古学）は、展示されている手洗い台や海図などの生活用品の破片を通じて、軍人たちの日常を想起する意義を説く。「終戦から70年がたち記憶も記録も薄れつつある中で、抽象化された歴史論争だけでなく、モノそのものから『読み取る』意味を知ってほしい」

午前9時半～午後5時、月曜休館。大人900円、学生600円ほか。問い合わせは、同館☎045（201）0926。

旧海軍 日吉地下壕の遺物

県立歴史博物館で特別展

2015.2.20 神奈川新聞

報告　**港北図書館でパネル展＆講演会を開催**　**運営委員　小山信雄**

昨年 12 月 1 日～28 日までの 1 ヵ月間、港北図書館 1F“港北まちの情報コーナー”にて日吉台地下壕のパネル展を開催し、7 日（日）の午前中には講演会、14 日と 21 日（何れも日曜日）の午後には“情報コーナー”にてミニレクチャーを行いました。

港北図書館の絶大なご協力をいただき、事前の広範囲（近隣区の各図書館、地区センター、行政サービスコーナー、ケアプラザ、港北区役所、港北図書館内など）に亘るチラシの配布や、広報よこはま、楽・遊・学など広報誌への積極的な掲載により、大勢の方に足を運んでいただけ、地下壕への関心を得る事ができました。パネル展では、1930 年代の日吉キャンパスが出来上がってゆく様子、1940 年代の軍国主義に大きく影響されてゆく学校施設や学生達、戦後の米軍に占拠されるキャンパス、そして現在の地下壕見学会コースなど 40 枚のパネルを展示。講演会では、「何故、慶應義塾日吉キャンパスに海軍の地下壕があるのか？」「キャンパスライフがどのように影響受けたのか？」等についてパワーポイントを使用し 60 分程説明を行ったあと、質疑応答の時間を設け、戦争体験者の方をはじめ様々な質問、ご意見等をいただき盛況な会となりました。

講演会 2014.12.7

38名の御参加いただきましたが、「高齢者の参加が圧倒的に多い図書館の事業の中で、今回の参加者の35％が現役世代（30～50歳代）というのは珍しいこと」とのことでした。アンケートも多数いただき、「日吉にこのような所があるとは知らなかった」「また開催してほしい」など貴重なご意見をいただき、こうした活動を地道に継続してゆくことの大切さを実感することが出来ましたので、是非また機会を作って行きたいと思います。

報告　**港北図書館でパネル展＆ミニレクチャーを開催　運営委員　佐藤宗達**

12 月 7 日(日)の講演会に続いて 14 日(日)と 21 日(日)の午後、ミニレクチャーをしました。14 日は佐藤・小山がご案内しました。2 時前から数名がパネルを熱心に見ておられ、2 時にお声をかけると 8 名が集まり、説明の途中から 2 名加わり合計 10 名になりました。

展示風景

日吉キャンパスの写真を見ながら年代順にアジア太平洋戦争の推移を説明しました。地図上に絶対国防圏を表示したのが分かりやすいと好評でした。次に地下壕の写真を見ながら定例の見学会の手順で説明しました。その後、質疑応答しましたが熱心な方々で約30分お話しすることができました。なお夕方、熱心にパネルを見てる方が居られたのでお声をかけたところ13日の定例見学会に参加、チラシを見て足を運んでくれたそうです。21日は長谷川・佐藤がご案内しました。県立歴史博物館のガイドの方が２名来られ、土曜日担当ガイドなので地下壕の定例見学会に参加できないこと

からパネル展とミニレクチャーに参加された。1 月末からの同館での展示の説明に役立てようと熱心に聞いてくれました。その後パネルを見ていた若い方から質問されたので順を追って説明したので合計３名をご案内しました。なおパネルを作成するにあたり、新井先生の接写した手持ちの画像からではなく、あらためて福澤研究センターから画像を提供していただきＡ３版に拡大した。見やすく、また未見のものもあり我々にとつても有意義でした。

寄稿　日吉勤務の元電信兵　大島久直さんからのお手紙(会報 118 号 8ｐ参照)

特攻隊員から「ワレ、イマカラ、ジバク」と受信

大島久直氏

大島久直氏

先日は日吉地下壕見学会に参加をさせていただきありがとうございました。想い出深い地下壕、一度は行って見たいと思って居りましたが機会がなく、新聞で見学会のことを知りぜひ参加したいと申込みました。84 才の老年で物忘れも多くなり、特に聴力が衰え補聴器使用で何とか生活をしている状態ですが保存会のガイドのみなさまの温い御支援と御厚意に依りまして 70 年前のことを思い出しながら楽しく見学することが出来ました。

《14 才で少年電信兵に志願》

つきましては時間の関係で聞き取り調査に御協力出来なかったので、私なりに当時の社会状況や私達の行動等について述べさせていただきます。私は1930年2月6日茨城県の片田舎に生まれました。小学2年生の時に支那事変が始まり、小学校5年生の時に太平洋戦争が勃発し、世は正に戦時態勢一色で小学校の児童まで軍国主義の教育を受け、13才の頃になると少年兵の募集が行われるようになる。男は軍人になることが国の為になる等と教育され、私達のクラスでも帝国海軍小年電信兵の志願を10人程して4人合格。そして採用通知を受けたのは私一人でしたので嬉しいよりも淋しい気持になりましたが、仕方がありませんでした。

1944 年 2 月 9 日、山口県防府海軍通信学校に入校の通知を受け、14 才の誕生日の次の日に家を出て村の神社に武運長久の祈願をし、村の人達や青年団学校の先生まで大勢で駅まで 4 キロの道を歩いて万歳万歳と見送りされ、駅からは父親と二人で東京に行き、夜 11 時発の軍用列車に乗車。父親と別れ、見知らぬ人と当時は 2 日掛りで山口県防府海軍通信学校に入校しました。

《防府通信学校をたった 6 ヶ月で卒業》

入隊して最初の挨拶が「お前達はお客様ではないぞ。今日からはこの軍人精神注入棒で鍛えてやる」等と言われたことを今でも忘れない。そしてその夜からは吊床（ハンモック）に寝ることになる。翌朝は総員起こし 5 分前の放送があり、起床ラッパと共に飛び起きる。それを片付けする。これがまた大変なのである。最初は片付時間が 5 分程要したが 1 週間後には 1 分間で片付けて整列する。出来ない者は罰則（精神棒）である。

軍艦では吊床は浮袋あるいは弾除けにするというので大事なことなのである。学校の生活は軍艦の生活を取り入れている。朝5時（冬は6時）に起床ラッパと共に始まり屋外に整列。練兵場を2キロ位ランニング。海軍体操、朝礼を行い洗面食事、甲板掃除（床を中腰になって磨く）等をして8時から5時まで教修日課で、6時夕食その後自由時間であるが班長の注意事項等ある。罰則等もこの時間が多く、その他洗濯、靴下の縫い。当時の靴下は３日位で穴があいてしまう。それを自分の物は自分で縫うのである。当時は男は針仕事はするものと思っていないので大変だった。９時消灯、臨検があり寝床に入り休むのであるが、その日に依り何か不祥事があると総員起こしが掛り懲罰や小言を言われる。

最初の３ヶ月は新兵教育期間であるが、電信兵は送受信のモールス符号の技術を早く身に

つけなければならない。午前中は送受信の勉強を、午後からは教練等をやりました。水泳やカッター訓練、３８式小銃を使用した戦闘訓練、実弾射撃等も一応行いましたが経験をしたという程度です。

通信学校の教育は今までは卒業まで２年間でしたが、半年間で卒業させることになった。１ヶ班 15 人で 14 才～18 才までおりまして、共同生活で仕事も学科教練等皆同じくやるので大変であった。あまりに過酷な訓練罰則等に耐え切れず、逃亡する者も 2、3 人居りました。上官からは罰則は禁止されていたようですが、現場の班長（下士官）達は罰則をしなければ気合が入らないと思っていたようです。そのため罰則は続けられた。

電信兵はモールス符号を 1 分間に 120 文字受信、送信は 1 分間に 100 文字出来るようにならなければなりません。成績の順番で 3 回に分けて卒業させるということで、皆一生懸命頑張りました。送受信は体力には関係しないので、私も 1 回目の卒業が出来ました。

《横須賀海兵団から日吉連合艦隊司令部・電信隊へ》

同時に巡洋艦高雄に配属が決まり、9月初めに横須賀海兵団に仮入団して高雄の入港を待つ。そして戦況は益々悪化して入港の予定はないということで、海兵団の中の山の中に地下壕があり拡張工事等をさせられて待つことになりました。巡洋艦高雄はレイテ海戦で大破し入港出来ないということで、連合艦隊司令部電信隊へ配属となり日吉に参りました。1945年の2月頃だったと思います。日吉の宿舎に入りましたが、今ではどのあたりにあったのかまったく見当が付きません。カマボコ兵舎を横目で見ながら、地下壕電信室へ通っていたことを思い出しています。電信室は92式特短波受信機が20～30台位あったと思う。照明が蛍光灯が点灯していたので初めて見ました。電報は受信専用であったのか、送信の記憶がない。電報はほとんど暗号文で秘密の高い順に、作戦緊急電報、緊急電報、至急電報である。普通電報に新聞電報というのがあり、カナの平文で送ってくるものがあった。これはニュースのようなものです。暗号電報は短波放送受信ですので、外国の通信やデマ放送等も入ったり、ダイアルの調整で混線したりし受信も大変であった。

92 式特短波受信機(左)

4 月に入ると日吉地区にも空襲があるようになる。あんな山の中で良くわかるものだなあと思っておりましたが、アメリカは日本の暗号はほとんど解読しているようであった。私も直接空襲にあい 10m位隣に落ちた時にはびっくりした。幸い不発弾でしたので命拾いしました。アメリカの焼夷弾の不発弾は半分以上あった。あの焼夷弾が全部破裂したら相当な被害があったと思う。

《奈良県大和航空隊で終戦、この戦争は何だったのか》

5 月に入り新入兵士と交替で、私は奈良県の大和航空隊に派遣され着任する。日吉と同じように山の中腹に基地があり、日吉の半分以下の部隊であった。空襲は日吉より多かった。通信施設の方には無かったが下の航空隊の飛行場へ何回もあった。宿舎から電信室へ向かう途中でグラマン戦闘機の機銃掃射をされたことがある。低空飛行で来て射たれたので、大変恐ろしかった。頭に小さな石を乗せ、これで終わりかと思いながら震えていたことがあった。電信室では九州鹿屋の特攻基地から沖縄方面に特攻機の飛び立つ様子が電報で入って来る。そしてたまたま隊員から生文で「ワレイマカラジバク」等と通信が入ったことがある。若い特攻隊員の最後の様子が涙をさそった。デマ放送等も多く受信され、敗戦の色も濃くなり 8 月 15 日の終戦となり復員する。

いったいこの戦争は何だったのか今更のように考える。戦争とは負けた方が悪いと決めつけられ、多くの犠牲を出し多くの負担をしなければならない。特攻隊員は一人も悪い人はいない。今、中東イスラムで多くの自爆テロを思うとき、何とかしなければと思ってしまう。1

日も早く世界中が平和であるように、祈らざるを得ない気がいたします。
　乱文乱筆に失礼致します。
　保存会の皆々様大変御苦労様です。末永く保存出来ますよう頑張って下さい。

大島　久直

（このお手紙は 2014 年 11 月 19 日にいただきました。お手紙では日吉での宿泊場所が「寄宿舎」となっていましたが、大島さんに確認したところ第一校舎１階ということなので、誤解をさけるため「宿舎」に直してあります。その他、明らかな誤字、誤記は直し、句読点も補ってあります。また太字の小見出しは山田がつけました。ご了承ください。）

元電信兵　大島久直さんからのお手紙　その２
こんな時代が二度と来ないことを願う
（先にいただいた大島さんからのお手紙で、わからないことがあったので山田より質問の手紙をお送りしたことへの返信です。12 月 9 日にいただきました。）

早速ですが手紙の件の御返事申し上げます。
①　「寄宿舎」の件、第１校舎の一階だと思います。カマボコ兵舎を遠くに見て通った記憶があります。
②　九二式特受信機は30台弱だったと思います。１人１台です。当直は朝昼夕夜と交代で半数づつ交代したように記憶しております。
③　「デマ放送」については、日本の外地にいる兵隊を捕虜にして首を切ったとか、手足を切り取った等、外人は悪いことをするんだなと思った。又日本が各地で戦争に負けていること等数多く宣伝していた。特に終戦１ヶ月位前から降伏した等の電文が多かった。
④　特攻機からの電文（生）は私は１通だけですが、他の人達も何通か受信していました。暗号文で最後にツ――途中で切れる。これも何通も受信した。
⑤　空襲の際に落ちた不発弾は焼夷弾です。直径が 15 ㎝長さ 50cm 位で円筒形のものです。地下壕の入口ではなく離れた場所でした。場所は見当がつかない。不発弾が多かったので命拾いした。外に 500ｋ爆弾とか時限爆弾も落とされた話は聞いておりますが、私は見ていない。
　私は 14 才になった 3 日後に海軍通信学校に入り大変苦労しました。世間のことは何も知らず、子供であり田舎者でした。14 才から 19 才までの人達と同じことをやりました。今考えるとよくやれたなあーと思います。中学生と大学生が同じことをやったようなものです。共同生活の中で教育訓練、実習、罰則、苦しみ悲しみ、時には空襲又は機銃掃射等を受けたこと。他に特攻兵（人間魚雷）等に志願させられる（私は採用されない）。みんな大変なことで言葉には言い尽くせない。今では想像すら出来ないと思う。今の若い人達には絶対にさせてはならない。こんな時代が 2 度と来ないことを願っております。

【お詫びと訂正】
前号の大島さんの聞き取りの記事で、誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
「三等兵だったが終戦で二等兵」⇒水兵長だったが終戦で二等兵曹
「蛍光灯は……20Wのもので長さ 30 ㎝位」⇒……60 ㎝位
以上、大島さんより 12 月 12 日に訂正とお叱りのお手紙をいただきました。確認不足でたいへん申し訳ありませんでした。重ねてお詫び申しあげます。　　運営委員　山田譲

転載 楽・遊・学(港北区の生涯学習と区民活動を支援する情報誌(第 234 号)より転載

シリーズ　わがまち港北　第 189 回

日誌が語る日吉の連合艦隊司令部　―終戦秘話その 18―

林　宏美(大倉精神文化研究所研究員)

前回の続きです。防衛省防衛研究所の戦史研究センターでは、連合艦隊司令部が木更津沖に停泊していた軽巡洋艦大淀から日吉の丘に移転してきた際の司令長官、豊田副武の日誌 4 冊(うち 1 冊は戦後に作成された摘録)を見ることができます。日誌は、個人的な感情をあまり交えず、遂行中の作戦の状況や敵機の来襲、参加した会合や基地の視察など、その日の出来事を箇条書きで記したものですが、記載が 1 日 1 ページ以上に及ぶ日もあり、多くの情報を知ることができます。

連合艦隊司令部の日吉移転に関わる記述が豊田の日誌に始めて登場するのは、昭和 19 年(1944 年)8 月 15 日のことです。そこには「GF(連合艦隊)司令部陸上施設至急研究」とあります。8 月 20 日、24 日には、移転に関する打合せが行われたこともわかります。また、日吉の陸上施設への移転に関しては否定的な空気があったことも窺えますが、具体的な内容について書かれていないのが残念です。但し、問題はすぐに解決し、着々と準備は進められたようです。9 月 25 日には、「首席参謀東京より帰艦、(中略)GF 司令部陸上移転問題に関し、省部(海軍省と軍令部)上司の了解を得る旨報告あり」と書いています。そして、9 月 27 日に、「荷物大部分を日吉に送出」し、翌 28 日は大淀での最後の会合を終え、29 日には日吉への移転を完了します。

中寮作戦室で執務する豊田司令長官と参謀たち
『聯合艦隊作戦室から見た太平洋戦争』より

ちなみに、日吉への移転直前の 9 月 27 日の日誌の冒頭には、「朝初雪の富嶽(富士山)を見る」と書かれています。甲府地方気象台のホームページを見ると、昭和 19 年の富士山の初冠雪は確かに 9 月 27 日になっていました。豊田は司令部が置かれていた大淀の艦上から、毎日富士山を眺めていたのかもしれません。

また、昭和 20 年(1945 年)2 月 9 日には、七面鳥が 1 羽孵化、10 日には 3 羽孵化したことが書かれています。日吉の司令部では、執務場所として使用していた慶應義塾大学の寄宿舎の横で七面鳥を飼っていました。豊田は七面鳥を可愛がっていたそうですので、雛が孵ったことが嬉しかったのでしょう。これらの記述からは、四季の移り変わりや新しい命に心を寄せる豊田の人柄が垣間見える気がします。

次は横浜の空襲に関する記述を見ていきましょう。昭和 19 年 11 月 1 日に、「1325(13 時 25 分、日誌中の時間表記は 4 桁の数字で書かれています)空襲警報、B-29×1、日吉南方を南西方に行くを見る、白煙を吐きゝつあり、関東地区来襲の嚆矢乎(始まりか)」という記述が見られます。日吉への B-29 来襲が日誌に登場するのはこれが最初です。また、12 月 8 日、10 日、11 日、翌 20 年 3 月 4 日には、空襲警報の発令や、敵機の来襲に際し、地下壕へ避難したことが書かれています。

昭和20年4月4日の日吉への空襲については、「0100頃、B-29×約90機、京浜地区に来襲、新宿、渋谷方面、川崎、横浜方面、焼夷弾爆弾混用爆撃す、日吉司令所兵舎、酒保倉庫全焼、庁舎硝子破損多数」と、司令部が被った損害が記されています。日吉では4月15日、16日に大規模な空襲がありましたが、その時、豊田は鹿児島県鹿屋基地にいたためか、日誌に記述

はありません。

豊田は終戦まで連合艦隊司令長官の任にあった訳ではなく、終戦を迎える約 2 ヵ月半前、軍令部総長へと転任しています。それに伴い、豊田は 5 月 29 日に日吉の地を離れます。奇しくも横浜大空襲当日のことでした。その日の日誌には次のように書かれています。

「0830 頃より敵戦爆連合大編隊京浜地区に来襲、0935 迄に駿河湾より侵入せるもの B-29×425、P-38×20、P-51×約 40 なり、攻撃目標横浜川崎方面、爆弾及焼夷弾混用す、1030 頃概(おおむ)ね南東方に脱却す、(中略)1400 補軍令部総長 1600 小澤新長官着任、儀礼例の如し。1645 日吉司令部退隊(後略)」

同じ 5 月 29 日のことを書いた日誌をもう一つ紹介します。当時、連合艦隊司令部の通信参謀だった元海軍中佐、市来崎秀丸(いちきざきひでまる)はこの日を次のように書いています。

「敵大編隊、横浜方面を空襲、市内の大半をやられたらしい。横浜方面の黒煙濛々(もうもう)たる内に長官の交代行事を実施する。一層厳粛悲壮の感がある。」

今回紹介した 5 月 29 日の 2 つの日誌からは、多くの犠牲を生んだ激しい空襲と、通常どおり粛々と進められた静かな儀礼との対比が浮かび上がります。

「わがまち港北」では、これまでにも、横浜大空襲当日の日誌や、戦争体験の記録をいくつか紹介してきました(第 32 回、第 33 回、第 140 回、第 164 回参照)。同じ日のことを書いた記録であっても、内容はどれ一つとして同じではありません。そこには一人一人異なる視点からの戦争が描き出されています。その全てをこの場で紹介することは到底出来ませんが、今後も可能な限り、港北区域の戦争に関する記録を取り上げていきたいと思います。

転載

2015.2.8
産経新聞

特攻の無線響いた地下要塞

横浜・日吉 連合艦隊司令部

記憶の風景

戦後70年

次世代へ 記憶を伝える

終戦から70年。戦争を知る世代が少なくなる中、自らの人生や地域に残る戦争の跡を残し、後世に伝えたいと願う人たちがいる。

軍中枢を知る負の遺産

「日吉台地下壕」保存し案内

茂呂秀宏さん(71)

横浜市の慶応大学日吉キャンパスの地下に眠る戦争遺跡「日吉台地下壕」の保存活動を続けています。戦争末期の1944年、本土空襲の激化に備えて日本海軍連合艦隊の司令部がキャンパス内に置かれた際に掘られた地下壕です。

コンクリートで固められたトンネルを進むと、作戦室や電信室、司令長官室などがあった空間があり、地上の司令部からは戦艦大和や特攻隊の出撃命令が出されました。多くの国民が亡くなったあの戦争を語る上で欠かせない海軍中枢部の舞台の一つと言えます。

地元の中学で社会科の教員をしていた26年前の89年、慶応の救職員や地域住民とともに保存会の設立に関わりました。

当時、地下壕は一般の人たちにはほとんど知られていない「知る人ぞ知る存在」でした。地下壕周辺の住宅地は戦時中に空爆も受けており、地元住民にとって地下壕は戦争のつらい思い出を連想させる「負の遺産」。地元の古老たちに戦時中の様子を聞き取り調査しましたが、当時は進んで語ってくれる人はまだ少なかった。

「子どもたちと一緒に聞き取りをお願いする中で、「自分の経験を伝え、後世に残してほしい」と口を開いてくれる方が多くなったのはここ10年ほどです。それだけ戦争の記憶はつらく、深いのだと感じます。

地下壕の見学者は年間約2500人。私はガイド役も務めています。修学旅行の一環で訪れる学校もあり、多くの子どもたちと一緒に地下壕の中を歩き、ここで何が起きたのか伝えてきました。

これまでは「戦争は悲惨だから絶対にしてはいけない」と言えばみな納得していました。しかし、終戦から70年が過ぎても、世界では様々な戦争が実際に行われています。「戦争と平和」という旧来の2項対立の中で「戦争はいけない」と言っても、今の子どもたちの心に届いていないのではないか、と最近は強く感じます。

あの戦争を直接知り、語ることのできる当事者たちの言葉の重みが増す中で、語り部たちはどんどん少なくなっていく。ただ、いずれ語る人がいなくなっても、戦跡は残ります。「物に磨らせる時代」がすぐそこに来ている中で、生きている人間がどんなメッセージを未来に伝えていくべきか、真剣に考える時期が来ています。

戦争は決して必然的なものではなく、その時代に生きている人間の選択によって起きていると私は考えます。これから先、戦争への道を選択しないために、過去に自分たちの住む街で何が起きたのかを知ってほしい。そんな願いを胸に、地域に残る戦跡を保存し、何が行われていたのかを伝え続けています。

（関含子・宮嶋加奈子）

神奈川の戦後70年を振り返り、未来を見つめる企画を続けていきます。空襲の記憶、戦地での体験、基地問題などを採り上げていく予定です。戦争や戦後の体験談のほか、戦争を知らない若い世代の取り組みなど、情報やご意見を募集します。朝日新聞横浜総局「戦後70年取材班」あてに、ご連絡先を明記のうえ、郵送かファクス、メールでお願いします。

2015.1.24 朝日新聞

書評

『「戦場体験」を受け継ぐということ』遠藤美幸著（高文研）を読んで

運営委員　小山信雄

１９４４年９月といえば、２か月前にサイパン島が陥落し日本全土がＢ２９の空爆の脅威に晒されることとなり、翌月にはレイテ沖海戦の敗戦で連合艦隊が壊滅状態となり、日本は制空権、制海権、戦闘能力を殆んど失ってしまった頃です。この時期に、ビルマ（現ミャンマー）と中国雲南省の国境（垃孟・龍陵など）で“援蒋ルート（米英による蒋介石への援助物資補給道路）”を巡って日・中が最後の攻防戦「雲南戦」を戦い、１００日に亘る死闘の末、１３００名の日本軍の守備隊は全滅しました。この本は僅かな生存者の方々からの貴重な証言を基に、真相を明らかにした著作です。

きめ細かで誠実な取材や聴き取りにより、銃弾が飛び交い砲弾が炸裂する戦場の壮絶さ、食糧も弾薬もこと欠くやりきれなさ、「戦場という特殊な場」における人間どうしの心の葛藤・確執などが生々しく伝わり、正に「戦場体験」をした思いです。特に、玉砕を覚悟した部隊から脱出して「最後の戦闘の模様を後方の本部や遺族に伝えよ」との上官命令を受けた木下中尉の心境は、如何ばかりであったでしょうか。終生重たい気持ちを持ち続けられたことも綴られています。

内容もさることながら、一番強く興味を惹かれたことは、著者と生存者の方々との出会いの過程です。勿論、始まりは乗務していた機内でのＯＢの方との出会いということですが、「垃孟」に具体的に関わることになるのは１７年も後のこと。その後は次々と関係者との人

脈が構築され、訪問取材、戦友会などへの定期的な参加、資料や手紙の読み込みなどを積み重ね、約１０年の歳月を掛け、一冊の本として私達の目に触れることとなりました。著者の真摯でピュアな人柄や、元将兵や遺族の方々と築き上げてきた信頼関係をベースに、「埋もれさせたくない事実」を生存者の方々から託されたのだと感じます。

雲南省への現地取材では、陣地跡地は勿論のこと、嘗ての「雲南戦」についての現在の現地での表記状況や、階級で差がつく墓所、「雲南戦」勃発４０年前（１８９９年）に建てられていた「英国領事館」の存在など、とても貴重なレポートに興味を持ちました。また、様々な意見の中、漸く寄贈が実現した「白塔村小学校（龍陵)」が、いつの間にか民間企業に売却され、「日中友好プレート」まで目隠しされてしまっている現状に、「戦争の傷跡」が如何に深く、修復が困難なものかを感じます。感想を述べると切りがありませんが、とても内容の濃い本でした。

著者の「公平な目で真実を見つめる」研究者としての更なるご活躍を期待します。次作をとても楽しみにしています。

連載　日吉第一校舎ノート（7）　古典主義とモダニズム

運営委員　阿久沢　武史

網戸武夫が、新設まもない横浜高等工業学校の建築学科に第１期生として入学したのは、大正 14 年（1925）である。ここで生涯の師となる中村順平と出会うことになる。

中村は曽禰中條建築事務所での活動を経て、大正 9 年（1920）にフランスに留学、パリのエコール・デ・ボザール（国立高等美術学校）で学び、ギリシア・ローマ建築を範とする伝統的なヨーロッパ古典主義の教育を受けた。帰国後、38 歳の若さで横浜高等工業学校の建築学科の主任教授となり、「激しく厳しい狂気の教育」を展開することになる。鉛筆の削り方が悪いと製図板の上に叩きつけられ、1 週間・2 週間は口をきいてもくれない。住宅設計のベースになるような家屋構造や木造建築の細部の納まりや建具など具体的なことは教えてくれない。講義はすべて抽象論で、法隆寺とパルテノンが同次元で講義に入ってくる。社会に出てすぐに役立つことは一切教えられず、外国の建築雑誌なども見ることが禁じられる。初学生の目移りするような眼前の対象はすべて排除して、ただ「建築の精神」のみを教育するものだったという（『建築・経験とモラル』)。

このように、網戸は中村からフランスのボザール流の古典主義を徹底して仕込まれることになった。対象はヨーロッパに限らず日本の古典建築も含むものであり、中村の教育は徹底したデッサンにその特徴があった。近代合理主義にもとづくモダニズム建築の思潮には目を向けず、視線はパルテノン神殿に、あるいは法隆寺夢殿に向けられた。網戸による中村の評伝『情念の幾何学』によれば、「捨てられた民族の遺産を掘り起こし、民族の根元的な形象と精神をデッサンを通して探求させながら、構成、比例、構造に亘る建築の一般原則の解明伝授を試みる」ところに中村の建築教育の中核があり、「顧みて自ら眼前の創造行為に対決し得るヒューマンとしての精神」が厳しく鍛えられたという。これこそが中村から学んだ「建築の精神」であった。「眼前の対象は一切、切り捨てられ、古今東西に亘る古典を解析すること以外、何も教えてくれなかった」（『建築・経験とモラル』）という「狂気」の 3 年間を経て、網戸は中村の薦めによって曽禰中條建築事務所に入ることになった。

当時、日本の気鋭の建築家たちはアールヌーボーに始まるヨーロッパから吹くモダンデザインの風を強く受けていた。ウィーンの「セセッション」、チェコの「キュビズム」、イタリアの「未来派」、ドイツの「表現派」、オランダの「アムステルダム派」と「デ・スティル」、ロシアの「構成主義」、フランスの「ピューリスム」、ドイツの「バウハウス」などの思潮が、ヨーロッパを駆け巡っていた時代だったのである。中村によって網戸はそうした流行から距離を置かれ、徹底して古今東西の古典を学ぶ基礎学習の三年を過ごすことになる。

日本における代表的なモダニズム建築として特に知られているのは、大正 13 年（1924）のレーモンド邸である。そこではデザインの幾何学化が進み、「四角な箱がいくつも喰い合わ

さり、そこに長方形のパネルが垂直・水平に差し込まれただけの構成」、「鉄筋コンクリートの壁が石もタイルも張られず、白くも塗られず、ざらざらした地肌をむき出し」にしたというきわめて斬新なものであった（藤森照信『日本の近代建築（下）』岩波新書）。その後、デザインの抽象化はさらに進み、建物は単純な箱型になっていく。箱型の建物の、凹凸のない平面的な白い壁一面に縦長の窓が規則正しく連続する、そうした無駄のない「白と直角のデザイン」を特徴とするバウハウス派がモダニズム建築の主流になる。その若き担い手の一人に、谷口吉郎がいた。慶應義塾で言えば、谷口の設計による日吉寄宿舎（1937 年）、幼稚舎校舎（1937 年）普通部校舎（1951 年）などが、その代表的な例である。

そうしたモダニズム隆盛の背景には、もちろん鉄筋コンクリート技術の普及と活用があった。ただ、網戸自身は、次のように中村から忠告されている。

「今、君達は、鉄筋コンクリートなどという新しい材料に目を注いで、建築は鉄筋コンクリートによってのみ表現できるなどと考えているようだが、それはとんでもない誤りだ。鉄筋コンクリートは、今でこそ新しい素材として面白いかもしれないが、やがて時代は変わるし、素材も変わる。鉄筋コンクリートに淫するな。」（『建築・経験とモラル』）

これはいかにも中村らしい忠告であり、教えであろう。この時期、鉄筋コンクリート建築が近代合理主義に合致して、モダニズムやバウハウスといった流行が「金科玉条のように蔓延し、教育はこの旋風に巻込まれて、身動きできないように」なっていた。網戸はこの時の中村の言葉によって、「目の前がいっぺんに開けたような」強烈なインパクトが与えられたと言う。

そのうえで、網戸は日吉第一校舎の設計にあたって鉄筋コンクリートを選んだ。そして、コンクリート打放しに白色スプレーを吹き付け、縦長の窓が規則正しく連続する白い箱型のモダニズム的デザインに近似させつつ、それと一線を画し、ギリシア的な列柱を配した古典主義の校舎をデザインした。彼の「曽禰達蔵と中條精一郎」（『東京駅と辰野金吾』所収）は、日本の近代建築を牽引した曽禰と中條の業績を回顧した文章であるが、その設計事務所で自身が関わった日吉台の計画と第一校舎の設計にふれ、次のように述べている。

近代合理主義の激流に抗して、鉄筋コンクリート架構がヒューマニズムに昇華する願いを、表現の可能性に貫いて、両師匠に献華したことで自負なしとしない。

幾何学的なモダニズム建築は無機的な形象に傾きすぎるきらいがある。網戸の言う「ヒューマニズムに昇華する願い」とは、やはりギリシア風の列柱を配した様式に集約されていると言ってよい。それは、学生時代に中村の「狂気の教育」によって鍛え上げられたボザール流の古典主義による「建築の精神」が形象化されたものでもあり、同時に卒業後の師である曽禰と中條、そして何より直接の影響を受けた中條の日吉台全体計画の構想の芯にあった「壮大なパルチー（根本方策）」と響きあうものでもあった。すでに見たように、中條は日吉の丘の上に 50 年あるいは 100 年先の若者の未来を夢み、中心軸上の中央道路左右に配された銀杏並木の育ちゆく若木の未来に、学生たちの成長をあわせ望んだ。ゆるやかな銀杏並木を登り切った先に立つ、それぞれに 8 本の列柱を持つ左右対称の一対の建物（第一校舎と第二校舎）は、鉄筋コンクリートの堂々たる佇まいと、白セメントスプレーを吹き付けた清潔感ある真っ白な輝きをあわせて、今なお「ヒューマニズム」と呼ぶしかない確かな存在感を感じさせているのである。

★日吉台地下壕紹介の新聞記事
・朝日新聞 1/24　戦後 70 年　次世代へ記憶を伝える「日吉台地下壕保存し案内」
・赤旗 2/4 日吉台地下壕と戦後 70 年　横浜で陸にあがった海軍展
・産経新聞 2/8 特攻の無線響いた地下要塞　横浜・日吉　連合艦隊司令部
★・県立歴史博物館　企画展「陸にあがった海軍」の紹介記事
・東京新聞 1/31
・神奈川新聞 2/20

☆地下壕見学会アンケートから2014年12月2日　慶応大学生（歴史学の授業での見学）

〇年令　10 代　14 名　　20 代　10 名　　男性　16 名　　女性　8 名

〇日吉台地下壕のことはどのように知りましたか（複数回答）

・授業　14（大学 13　高校 1）・友人　5・新聞など　3・親から　1・その他　2

〇今日の見学会はためになりましたか。　5 段階評価してください。

・大変良かった 14・良かった 8・普通 1・期待はずれ 0・まったく期待はずれ 0・無回答 1

〇特に印象に残った場所や説明がありましたらお書きください。

・作戦室・暗号室・電信室・戦艦大和の出撃命令など、悲惨な戦争末期の作戦が日吉で練られていた事に衝撃を受け、大和や特攻隊の電信を日吉で受けていた事
・地下壕の構造の説明、当時の技術
・電信室での話、本当に戦時に使われていた事を実感
・沖縄と比べてずっと快適な空間に驚いた、複雑な心境
・史実に沿った地下壕の説明は学んだ知識に裏付けられるようで理解しやすかった
・内部の広さ、コンクリートの壁の厚さ、爆風避けのＴ字構造など、様々な建築の工夫
・日吉の空襲被害・耐弾式竪抗の説明・

〇見学会全般のご感想やご希望がありましたらお書きください。

・予想以上に暗かった
・地下壕の歴史や背景、改めて日本史における戦争の重みが理解でき参考になった
・戦争の重要な作戦が日吉で立てられたことを知って日吉の街を見る視点が変わった
・当時の様子を少し感じられたと思う
・今後学んだ上でまた行ってみたい
・想像したよりも広く、しっかりした作りだった
・戦争全体に関する話も聞けて勉強になった
・私有地で見学できない場所があり、残念
・現場で証言に基づいた説明を聞き、現実味が湧いた。

見学会風景

・憲法九条、集団的自衛権の改正がささやかれる中、こういう形で戦争を感じることができてよい経験になった
・見学時間が短く他の箇所を見られず残念
・内部が想像よりもきれい・建て方の詳しい説明がよかった
・案内がわかりやすく、事前に知識がなくても理解できた
・戦争を身近に感じられる貴重な機会、継続してほしい
・人の記憶は消えてしまうが、遺跡・建造物は残せるというお話に感銘を受けた。

〇現在地下壕保存の会では寄宿舎の場所に平和ﾐｭｰｼﾞｱﾑ建設を慶應義塾に要望していますが、どのような内容にするかなど、ご意見がありましたらお書きください。

・ﾐｭｰｼﾞｱﾑ建設は多くの人に知らせるために意義がある
・日吉という街を深く知ることができる内容を
・地下壕内部が目に見える形の展示を作ってほしい
・当時の様子がわかる写真の展示・戦争経験者の生の声を記した資料
・是非すすめて欲しい
・慶應ならではの要素も多く取り入れて
・慶應の学徒出陣についても入れてほしい
・実際に働いていた人の証言を紹介して欲しい
・日吉と地下壕、戦争との関わりやその歴史など

★活動の記録　　2014 年 12 月～2015 年 2 月

12/1～28　港北図書館・日吉台地下壕保存の会共催事業
　　パネル展示「日吉台地下壕」　　港北図書館１Ｆ
12/2　地下壕見学会　慶応大学歴史学授業　大学生 41 名
12/5　会報 118 号発送（慶応高校物理教室）
12/7　日吉台地下壕パネル展講演会（港北図書館会議室）
12/10　地下壕見学会　慶應義塾高校　高校生 10 名　先生 2 名
12/11　地下壕見学会　県立歴史博物館ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｶﾞｲﾄﾞ OB13 名
　　運営委員会（来往舎 205 号室）
12/13　定例見学会　53 名
12/18　地下壕見学会　川崎市高津市民館　18 名
12/20　地下壕見学会　慶應義塾生協　22 名

見学会

2015 年
1/7　運営委員会（来往舎 205 号室）
1/9　地下壕見学会　日吉南小学校　6 年生 128 名　先生 5 名
1/10　ガイド学習会（菊名フラット）ｶﾞｲﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄﾏﾆｭｱﾙ作成他
1/14　地下壕見学会　コープみらい　56 名
1/17　第 9 期日吉の戦争遺跡ガイド養成講座①（来往舎中会議室）
　　保存の会新年会(日吉・小青蓮)
1/22　地下壕見学会　神奈川大学付属中学校 PTA　23 名
1/23　地下壕見学会　川崎市中原市民館　23 名
1/24　定例見学会　44 名
1/29　地下壕見学会　日吉本町西町会　38 名
1/31　第 9 回地下壕保存の会公開講座　「地下壕の時代、青空の時代」
　　講師：小沼通二氏（慶応大学名誉教授　物理学者）　参加者 63 名
2/4　地下壕見学会　都筑をガイドする会　20 名
2/6　地下壕見学会　練馬稲門会 43 名　県立歴史博物館ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｶﾞｲﾄﾞ 5 名
2/11　ガイド学習会（菊名フラット）ｶﾞｲﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄﾏﾆｭｱﾙ作成他
2/16　運営委員会（来往舎 205 号室）
予　定
2/26　会報 119 号発送

☆定例地下壕見学会　毎月第 4 土曜日 13 時～（原則）
　　3/28 ・4/25（締切りました）・ 5/30（第 5 土曜日）・ 6/27・7/25
●訂正　118 号記載の見学会日程　1/28・3/22　は、2/28・ 3/28　の誤りです

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。
　　お問い合わせは見学会窓口まで　℡045-562-0443（喜田　午前・夜間）

連絡先(会計)亀岡敦子:〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15　℡ 045-561-2758
　　(見学会・その他) 喜田美登里:横浜市港北区下田町 2-1-33　℡ 045-562-0443
ホームページ・アドレス：http://hiyoshidai-chikagou.net/

日吉台地下壕保存の会会報　　(年会費) 一口千円以上
発行　日吉台地下壕保存の会　郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表　大西章　　(加入者名) 日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会